

12代のヲシロワケ(景行天皇)さまの時は、大陸からの外圧が年々強くなってくる時代でした。古墳をたくさん作る経済的余裕は出来たのですが…。(ため池で)

ヤマトタケさまが、激動の時代をかじ取りしてくれるものとの期待が、タケさまの早世でまぼろしの夢となってしまいました。

『ホツマツタエ』の編集が成ったアスス843年(ヲシロワケ56年)の後、2年後には高穴穂のミヤに御幸をなさいます。ヲシロワケ(景行天皇)さま58年(続アスス845年。アススは843年まで、その後は続アススと言います)のことでした。そして2年後に、高穴穂のミヤにて崩御なさいます。(146歳、『日本書紀』の106歳は誤記)



ワカタリヒコ
(ウチヒト)さま
が13代のスヘ
ラギ(成務天皇)
に即位されます。
高穴穂のミヤが
ミヤコとなりま
す。天智天皇のと

きと同じ、近江のミヤコ。近江が対大陸の前線基地的な意味合い。38代天智天皇(在位668年-672年)

ヤマトタケさまのお子様のタリナカヒコが14代のスヘラギ(仲哀天皇)をお継ぎになられます。(高穴穂のミヤ)仲哀天皇はクマソの平定で非業の崩御だったようです。その弟君のワカタケさんは特に他に記載はありませんでした。

40、アツタカミ ヨをいなむ アヤ 後半

十二代 景行天皇 38:39-40アヤ、三分割の下の後半

ミツルナヒ

③ 43歳でお亡くなりになられてしまったヤマトタケさまでした。(アスス830年) 病没なので致し方ない

とは言え、あまりにも早世の痛みです。せめてもお見送りを盛大に「国葬」のようにして済ませたのちも、ヨシロワケさま(景行天皇)の憂鬱さは晴れませんでした。そうこうするうちに、ヤマトタケさまの母上のハリマのイナヒのヲイラツメがお亡くなりになられます。(アスス839年) ヨシロワケさまはさらなる落胆でございます。

40:64

アスス831年から832年の事でした。アメのミチを学びたいと、ヒタカミから来ていた5人のクニツコ(後の国造に近い)が居ました。ヤマトタケさんは、イセ(伊勢)のヤマトヒメに預け置いたのでした。ですが、イヤマイ(敬い)の心が無いため、問題になります。ヤマトヒメは困って、エソ(ヒタカミから来たクニツコ達)を咎めて此処には置けないからと、ミカト(朝廷・ナラ)に申し送りました。

さて、ミカト(朝廷)では、ミモロ(三輪山付近)に置くことにしました。そうしますと、程もなく勝手に木を切ってタミ(民衆)の妨げを働きました。伸びやかな自然豊かな土地に暮らしていたら、せせこましいミヤコでの生活にはなかなか馴染めないものなのでしよう。ヨシロワケのキミ(景行天皇)はおっしゃいます。

40:65

「エミシ達は、人ごころなく、(此处、ミヤコ)には置き難きものです。ママ(適当)に別け置きます。ハリマ(播磨)と、アキ(安芸)と、アハ(阿波)と、イヨ(伊予)と、サヌキ(讃岐)にと、サエキへ【詳細は未詳】とします」

40:66

ヨシロワケさん(景行天皇) 46年(アスス833年)のハル(春)のナナクサのミアエ(七草の年中行事)の事でした。ウタの日数(31日?)まで経ても、ワカタリヒコとタケウチとが詣で来ないのでした。そこで、二人を召して尋ねましたところ、ワカタリヒコが答えました。ワカタリヒコは、フタチイリヒメさんとの間のミコ(皇子)です。

「エラク(行事に集中する)日は、アソビ(アに添い行く、遊び)戯れて、コト(危険)を忘れるものです。クルエト(狂う人)があれば、この隙を狙って窺うものでしょう。この為に、ミカキ(御垣)を守っておりました」

ヨシロワケさんは、ワカタリヒコの心遣いを篤くお褒めになりました。

40:68

ハツキ(8月)3日に、ワカタリヒコを世継ぎのミコにと定めになりました。タケウチ・スクネはムネのトミです。ワカタリヒコと、タケウチとは同じ年の生まれです。

40:69

52年(アスス839年)サツキ(5月)スエヤカ(28日)に、キサキのハリマのイナヒ・ライラツメさんがお亡くなりになりました。イナヒのライラツメはヤマトタケさまの母上です。ヤマトタケさんの薨去から9年の後の事でした。見送りノリ(葬送のやり方)はアツタノリでおこなわれます。

オオタンヤワケ(タニハミチウシの子、フタチイリヒメの父)がミケ(お粥)を炊いで、チリ・ヒル・メシ(良くない事を、払い除く、メシ(ミケ))としてヒラテ(平皿)に盛ります。孫娘さんのヌノオシヒメにチリ・ヒル・メシを恭しく頂かせます。ソフ・タンヤワケ(オオタンヤワケ?)は先駆りに立ちます。次はヒメミコ(皇女)が続きます。次に、スケ・キサキや、ウチメや、オシモメ、アオメ達の30人が続きます。

40:71

その次に、モトモトのヤイロハタ(トホカミエヒタメ)と、カミコト(源流のコト)



の48の音韻のヲシテを別け染めて、キヒ（吉備）のイエトミ（郎党たち）が持ち並びます。

そして、タテモノ（形取った掲げ物）のクモ（雲）を掲げて架け橋に見立てたカスミ（霞）にチトリ（千鳥）も掲げます。次に、キヒ（吉備）の卫（兄）タケヒコと、ハリマ（播磨）のオト（弟）タケヒコがヨハキシ（箒状のものか？）を持って、マテ（左右）に並んで歩みます。ミハシラ（ワイラツメさんの依り代）はウチミヤ（キサキのミヤ）のトミが寄り添います。そしてミコシ（神輿）が続きます。ミコシに繋がるヌノ（布）のミラスエ（糸の端）に、ミコ（皇子）達が縄（すが）り行きます。ヲシカト（勅使）は、ウツシ・ヒのオミ【詳細は未詳】でして、コシ（御輿）に乗って行きます。こうして、諸人が行列を為してお見送りをしました。ハリマのイナヒ・ワイラツメのミササギ（御陵）は、加古川市大野日岡山、加古川を望む丘に営まれてあります。

40・74 アフミ（7月）ナカ（7日）に、ヤサカイリヒメさんがウチツミヤ（正皇后）になられます。アスス839年？ 840年か？

40・74 53年（アスス840年）ホツミ（8月）に東国巡幸のミコトノリをされます。

「返り思ってみても、空しさが込み上げてきます。せめて、コウス（ヤマトタケ）がムケシ（帰順させた）クニ（土地）を巡りたいものだ」

と、おっしゃいまして、ミユキ（御幸）に出発なさいました。先ず、イセ（伊勢）に向かわれます。そして、オハリのツシマ（津島市、津島神社）に至りましたら、オハリのムラシ（連）が出迎えに来ていました。オハリのムラシはミヤスヒメの父です。ヲシロワケさん（133歳）に比べて、齢はうんと若いのです。オハリのムラシは、オハリのムラシと一緒にハラミ（富士山）への道を歩まれました。そして、共に、オホマのトノ（富士山南麓のミヤ）にお入りになられるのです。

40・76 ヲシロワケさん（景行天皇）は、おん（御）親（みず）からニギテをお作りになって、捧げられました。そして、おっしゃいます。

40・76 「親子のユクリ（親密な時間、余裕）も得られないで居ました。ヲヲヤケ（パブリック）の仕事は多義に複雑に絡んでいますから難しいものです。それで、そのまま、別れ離れて会う事も出来ずになってしまったのです。わたくしは、コウス（ヤマトタケ）をどうしても忘れることが出来ません。齢もあと限られていきますから、自ら此処に来たってニギテ（幣を捧げる）を為します」

と、ヲシロワケさんは、じっと、長い間祈念を為され続けられるのです。コウスのミコに、痛ましきかなと、お祈りをされるのです。

40・77 さて、その日の夜の事でした。ツシマ（尾張・津島）から付き添って来ていたツシマ・モリは、ユメ（夢）を見ました。シラ・イトリ（白い大きな鳥）が現れて、ヤマトタケ

さんの姿に変貌するのです。それで、おっしゃいますいのです。不思議な事に、ヲシロワケさんも同じ夢を見たのです。

「ヲヲカミ（アマテルカミ）は、ソサノヲにおっしゃいました。『いかなそ（如何にぞ）クニのそむ（施政官になろうとする）ならば、それには「アメノリ」を為せばこそで、クニのカミ（後の国司に近い）にも任命出来ます』」

40・79 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

◎**㊸**㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

ところが、ソサノヲには教え諭しのウタが解けませんでした。それでツミ（罪）に陥ってしまうソサノヲでした。それを、イフキヌシ（ツキヨミとイヨツヒメとの間に生まれた）が助け起こして功績を上げさせてくれたのでした。ソサノヲは、カミ（後の国司に近い）に任じられます。

40・80 「ニキネさんは、この「アメノリ」の心を以って「ホ・ツ・マ（作物が、集まり、生じる原理）」を得てアマキミとなったのでした。

40・81 羨んで、カリのヲヤコ【詳細は未詳】にと、「コウス（ヤマトタケ）として生まれ来たったのでした。イノチは長い歴史の内、たまたま借りているだけ。と言った意味も込められてあるか。（合田さんの読み取りです）

ヲシロワケさんのミコト（命）を受けてキツ（東・西）をムケて（平定して）帰りました。カミ（祖先の偉人たち）も心静かになられたことでしょう。しかし、心残りは、ヲシロワケさんに見える事ができなかったことです。アツサタス（アモトから伝わり集まり広がって、結実してくる）タラチ（父親）の恵みを嬉しくないと思わないわけはありません。

40・82 そう言って、「コウス（ヤマトタケ）はオリカソエ（ナカツホから前後に意味を含んでいるウタ）のツツウタを示すのでした。（何の言葉が詠み込まれているのか？）

◎**㊸**㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

◎**㊸**㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

ミツルナデ
③ シマハは、罪人の着る縞々の着物の事。イレスミ（入れ墨）のことも。

40・83 三度、述べてシツの姿（流浪の旅姿）になって雲の向こうに隠れて行きました「キミ（ヲシロワケ）は夢が覚めました。そして、おっしゃいました。

「カミ（ミタマのヤマトタケ）の告げでした。コウスは言うわけでした。

『われは、生まれ変わりの前は、いやしきヒカワカミです。元に帰るだけです』
わたくしが愛情に凝り固まっている迷いを覚まして諭すための示しだったのです。

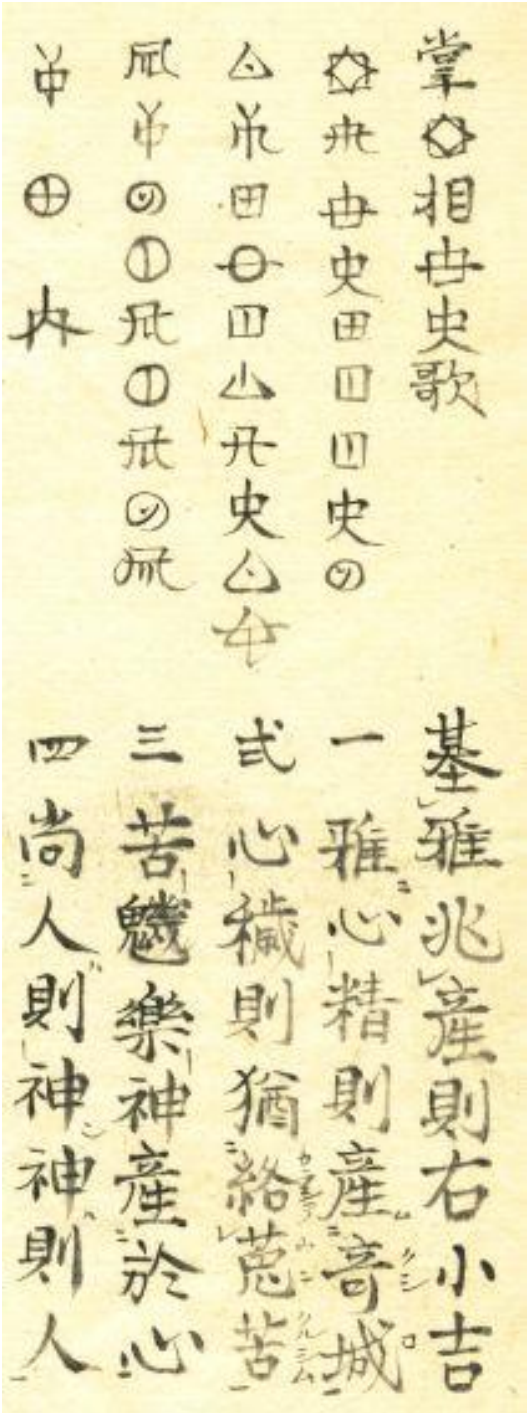
考えてみますと、昔の言葉にもありました。

『ヒトはカミ カミはヒトなり』と、タツの子の教えの中にありました。トヨケカミのお言葉（ホ26・36）です。

『フトマニ』（ヲヨロ）にもよく似た意味の言葉があります。

ミツルナビ
③「カミ」の言葉は多くの意味合

ミツシレハ	タツキミコトク
カミトナル	タツキミイカン
①丹中②火	丹中丹中①※
タツハヒレ	ミツシルユエニ
丹卒の丹中	丹卒丹中火中丹
ウロコキミ	カンツミオニオ
△史田中丹	①※丹中丹中
ミツシレバ	ヒトハカミナリ
丹卒丹中	丹中①丹中



いがあります。単純に「神」と直訳したらおかしくなりますね。「直訳偽書の秀真伝（しゅうしんでん）」を排除して駆逐しましょう。

これは、名にも誉れの「カミ」と「ヒト」の称です。ミチを立て行くノリのカミは、「ヒト」に名乗ります。アマカミの名乗りの名です。「ヒト」がスナホ（純心）にて「ホ・ツ・マ（作物が、集まり、生じる原理）」に誠心誠意にゆけばまことに「カミ」と呼ばれるべきものです。この夢からの告げに拠って「ウス（ヤマトタケ）はアツタカミとして称（ただ）えて祭りましょう」

40・85 ミヤスヒメは、アツタカミをイツキ（奉祭する）します。そしてクラハ【ヤシロの守りの職掌、か？】を置きます。また、カンヌシ（社掌、宮司）も置きます。ミヤツカサナ
ミ【詳細は未詳】です。

40・86 さらに、ヲシロワケさん（景行天皇）はアツマチ（関東地方への道）にお進みになりました。サカム（相模）にて、サクラネ・マシと、ホツミ・テシとがお迎えしてミアエ（一馳走）して持て成します。そして、ヲシロワケさんを拝してマシもテシも、泣きながらに言うのでした。

「ヲトタチハナヒメを亡ぼしてしまいました。もう、見える事も出来ません」
キミ（ヲシロワケ）も涙に暮れるばかりでした。

40・87 そうしまして、ミサシ（カクの実を挿す、武蔵）に進みますと、トラカシハ（虎柏神社、調布市）がサカキ（榊）で作ったミスカタ（人形）を奉って来てくれました。キミ（ラシロワケ）が見てみますと、ヤマトタケさんの姿にそっくりでした。

40・88 「ひとたび会う事が出来たようです。まったくもってよく似た、かれに、メクロ（目も黒い）」と」

そこで、この郷（さと）の名前を「メクロ（目黒）」とお名付けになりました。

（大日本地名辞書に「江戸砂子」の記事が載せられています）慈覚大師（円仁）の時には、

江戸砂子云、目黒不動堂は、往昔日本武尊を祭り、土民称して荒人神と云へり、然るに慈覚大師巡行の折から、此村に宿り、土民の請に依り、武尊の像を造り、内陣に容れたまふ、是は日本武尊焼津の故事にもとづて祭ります。【詳細は未詳】

40・89 ラシロワケさんを乗せたミフネ（行幸船）はカツサ（上総）に行きます。アホのハマ（富津岬の付近）にて、ミサコ（浜辺にいる小型のタカ・鳶）が食べているエ（餌）をタミに問われました。

タミは「あれは、ウムギ（アオヤギ？ ハマグリ？）です。シツ（私たち一般人）も好んで食べます。ナマス（お刺身）も良いです」と答えます。そこで、ムツカリ（ナナツカハキの子孫）がカマ・タスキをしてウムギ（アオヤギか？ ハナクリか？）を取り、ナマス（刺身）に作って勧めました。ここに、カシハ・トモヘ（後の大膳職）の名を賜るのです。

40・89 オホヒコ（8代クニクル（孝元天皇）のミコ）のマコ（子孫）のイワカナリがお供して案内していました。カシマにてシシマイをご覧になられたのですね。カシマ・カクラ（鹿島の神楽）のシシマイ（獅子舞い）の謂（いわ）れを問いました。カシマのトキヒコは、謂れを説明します。

「これは昔の事で御座います。

ツチキミ（サルタヒコ）がイヨ（伊予）に渡った折のことでした。シシ（イノシシ）が作物を貪り食べるので、ツチキミはこれを捕って朝廷に奉ったことが本居（もとい）です。シシマイは、茨城県の石岡市で盛んです。

40・92 キミ（ラシロワケ）も楽しみ見られるカクラ・シシでした。カシマのカクラ・シシはヤヨロ（8万年、マサカキ・コヨミでの計数年）もの長い間にも渡って伝え続けられてきたものでした。人々に病（やまい）など障害の無きようにと祈って弄ぶサルタのカミの名前に因んで言うようになります。病（やまい）も去る、の意味を持つのがサルタヒコのカクラです。

40・93 ラシロワケさん（景行天皇）は、53年（アスス840年）シハス（12月）に、イセ（伊勢）に上（のぼ）ります。そして、イロト（妹、義母妹）のおいでイソのミヤ（磯神社、伊勢市）に滞在なさいました。

翌年の、54年（アスス841年）ナツキ（9月）ミソカ（30日）には、ヒシロのミヤ（桜井市）にお帰りになりましたのでした。

40・94 1つの時に、ミワのタタネコは、ミヨ（御世）のフミ（文献）をアミ（編集）まして、カミヨ（光輝ある古代の御世）の「ホ・ツ・マ（作物が、集まり、生じる原理）」の「チ（ミチ、生じさせるべく、集まり為し行く）」の歴史を明らかにするものとして、40アヤに編集しました。

クニナツ（オオカシマ、カスガの家の当代当主）に、これを示しまして、また、クニナツは『ミカサフミ』をミワに示しました。良く読みましたら、それぞれが、職分にあった良い内容に仕上がっていました。相談の結果、新たにフミを染めて、浄書・浄染の美しいフミ（文書・文献・巻物）を、この二家（ふたや）より、ヲシロフケさんの許に、朝廷に上程献上を致す次第になりました。

40・96 そもそも、この我が家のフミ（文書・文献・巻物）は、モノヌシ（6代目、クシミカタマ、ワニヒコ）が、12代ウカヤフキアハセスさんのミコトノリを受けて編集しました。これが、前半部分になります。クシミカタマは、アワミヤ【多くの候補地あり。1、奈良市、率川阿波神社。2、徳島県阿波市、事代主神社。他にも多くあり】に入れ置きまして。その後に、写されて伝承されたフミや、諸家で編まれたフミに、マチマチ（違い）が生じてきています。食い違いがあるからと言って簡単に誹謗（そしる）する事に走らないようにしてください。記述する際にも、また、伝承してゆく際にも齟齬（そご）は生じやすいものです。モモチ（百・千）に試みて、遥かなる尊いカミチ（光輝の源の古い時代の精華）にと、まさに、入りゆくべしです。

40・98 時は、アスス843年のアキ（秋）のアメカ（天空が澄み切って、日差しが美しい日）です。これ（『ホツマツタエ』40巻）を献上して奉ります。

わたくし、ミワのトミ（臣）のストアトシ（オオタタネコ）は、畏れつつも謹みてソム（浄書、謹み染める）もので御座います。

...

「直訳偽書の秀真伝（しゅうしんでん）」の人々

故、吾郷清彦（哲夫）

故、鳥居礼（梶谷欣弘）

故、神渡良平（猿渡）

故、鎗国男

千葉富三

などなど